

本佐倉城跡

— 往時の姿をとどめる名城 —

本佐倉城は、戦国時代の文明年間（1469～87年）に千葉氏の本拠地となった城です。城の構造は、城に付属する主要な建物群（内郭）を中核に、武家屋敷、寺社などを配置したつくりです。さらに、城の北側には、「香取の海」（現在の印旛沼）が迫っており、城の守りを固めていました。

これまでに実施された内郭の発掘調査では、城主の生活空間であった主殿、防衛のためにつくられた木戸や櫓の跡などが発見されています。また、饗宴や儀式で使われたとされるかわらけ（使い捨ての素焼きの器）や、外国製の陶磁器、古銭が出土しており、千葉氏の栄華をうかがい知ることができます。

現在でも内郭には、空堀や土塁、虎口（狭隘な出入口）などが良好に残っており、ここに立つだけで往時の姿を想起することができます。

なお、本佐倉城跡は、その歴史的重要性を評価され、平成10年（1998）、国の史跡に指定されました。城跡は、佐倉市と酒々井町にまたがっており、現在、佐倉市教育委員会と酒々井町教育員会で整備、活用を行っています。



本佐倉城跡を上空から望む



大佐倉の勝胤寺にある千葉氏の供養塔

千葉氏は、桓武天皇にさかのぼり、高望王の子・平良文を祖とし、下総を中心に勢力を拡大しました。常重の頃、千葉氏を名乗り始めたといわれています。

千葉氏が一躍名をはせるのが、千葉常胤の時代です。時は平安時代末、源平の合戦のころ、常胤は源頼朝の拳兵に依りて勢力を拡大し、下総一帯を治めました。常胤の死後、所領は6人の息子に分割して相続され、以後、全国各地に千葉氏一族が分散しました。15世紀になると、関東地方広域を舞台に生じた「享徳の大乱」によって、一族が血を血で争う内紛に陥りました。そうした戦乱を経て、15世紀後半に、千葉氏は本佐倉城に本拠を移しました。戦国時代末、小田原北条氏と姻戚関係を強固にし、豊臣秀吉と戦いましたが、小田原合戦に敗れ、城主の地位を追われました。



千葉氏は、天空にきらめく北極星を一族の守護として崇拜した点に特徴があります。この信仰を妙見信仰といい、夜空の月や星といった星辰を図案化した「月星紋」を家紋として用いました。



妙見信仰に篤く帰依した千葉氏は、各地に妙見神社を建立しました。戦国時代、本佐倉城の奥ノ山には、妙見神社が建てられていたことがわかっています。現在の妙見神社は、奥ノ山の裾野にひっそりとたたずんでいます。

千葉氏

— 全国に散らばる名族 —

「香取の海」

— 中世の印旛沼周辺 —

印旛沼が現在のような姿になったのは、昭和40年代以降のことです。中世のころ、印旛沼は、手賀沼や霞ヶ浦とともに「香取の海」として、広大な内海を形成していました。したがって、戦国時代の本佐倉城周辺は、印旛沼の「波打ち際」にあったといえます（その頃の印旛沼の広がりマップ上に示してあります）。そのため、当時は、船による水運が発達していました。現在の大佐倉字浜宿あたりは、いまとなっては田畑ですが、浜宿湊と呼ばれ、船荷の積み下ろしなどを行った河岸が整備されていたといわれています。また、交易の要衝であった湊を見下ろす高台には、砦も築かれていました。

本佐倉城跡の小高い丘の上から、京成電鉄の線路方向を見てください。牧歌的な田園風景が遠くまで広がっていますが、戦国時代には、敵の侵入を容易にさせない水辺が広がり、見晴らしのきく城の物見櫓からは、敵襲を早急に察することができました。防衛という点からも、本佐倉城は、効果的な場所に築かれたことが分かります。



本佐倉城跡に立ち、「香取の海」を想う



将門町に残る桔梗塚

平将門（940年没）は、平安時代、下総の国を拠点に、西国の朝廷に反旗を翻して関東一円を実効支配した武将です。最終的には、朝廷の派遣した藤原秀郷らに打ち取られてしまいますが、千葉氏は、将門の伯父平良文を祖としていたこともあり、勇猛果敢な将門を厚く信仰しました。◀

将門伝説と千葉氏

— いまに生きる伝説 —

現在、将門町には、将門の愛妾であり、敵將に将門を討たせる手引きをした桔梗御前を偲ぶ小さな塚が残っています。この塚について、江戸時代の佐倉藩士渡邊善右衛門は、当時の佐倉の様子を綴った『古今佐倉真佐子』のなかに、桔梗が一面に自生しているものの、決して花が咲くことがないと将門の強い怨念を書き残しています。

また、江戸時代の佐倉藩主堀田正信は、千葉氏が信仰したとされる将門山に石造の鳥居を寄進しています。平将門への畏敬の念が、時代を経ても強く残っているといえます。

[発行] 佐倉市教育委員会 文化課
佐倉市海隣寺町 97 番地
令和2年3月